「比べる」ことでせまる音楽の魅力
～思いや意図をもって表現できる子どもに～（３年次）

１．研究テーマ設定の理由

（１）学校提案とかかわって

昨年度の重点目標《「吟味を生み出す対話」をつくる》にあたって，音楽科では「比べる」をキーワードに「小グループにおける協同的な学び」の実践・実証を重ねてきた。質の高い「ジャンプある学び」成立の要件として，目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。また，繰り返される旋律や同型反復など，ある部分に注目することで子どもの学びが高まったのではないかと考えた。

音楽科でとらえる「対話」については，『音楽とは対話である』（アーノンクール 2006）が示すように，①音楽作品そのものが「対話」によって構成されているばかりでなく，表現に際しても様々な「対話」が要求されているのではないか。②（このことから）「対話」という視点を音楽の授業活動の中に取り入れることで，音楽がもつ本質的なもの（部分）に触れることができるのではないか。③（さらに）「比べる」をキーワードとすることで，音楽作品に内在する様々な「対話」，音楽活動における人間（演奏する子どもたち）同士の「対話」が顕在化するのではないか。―と考えた。

今年度の重点目標《自己の変容へとつながる吟味》については，次の４つのことから達成できるようにしたい。

- 子どもの育ちが見える題材構成・評価計画を心がける。
- 学年に応じて子どもが使える音楽的言語・用語の層を厚くする。
- 「比べる」活動を用意することで，対象や他者，あるいは自己との多様な対話をつくる。
- 「言葉の吟味，考えの吟味」（秋田 2009）が，言語活動を通して価値観形成へと至る過程で，表現領域の活動にも繋げられるようにする。

①音楽科における協同的な学び

音楽科における協同的な学びは，それぞれの子どもの感じたことをグループあるいは集団で共有するところから始まると考える。感じたことを言葉で伝えられる場合もあれば，実際の歌う・演奏する・つくる・聴き合う活動を通して伝えることもあるだろう。「本当に○○君の言うとおりだ」「私の考えとは違う」「次は○○にしてみよう」など，共有から生まれた気づきを課題として設定していく。そうすれば，子どもたちは課題を自己の課題ととらえて取り組むことができると考えた。対象にどっぷりと浸かることで，子どもたちは自分の考えの理由や根拠を，対象や既習内容から見つけて吟味し，協同的な学びを生み出すと考える。

例えば，ただ○○したいという気持ちだけで話し合ったり，１つの音楽をつくったりするのではなく，

・この歌詞が○○な情景を表しているから，ここは○○な感じで歌おう
・p（ピアノ）は「弱く」と習ったけれど，ここのpは「弱い」に付け足して○○に演奏しよう

というように対象や既習内容の中に理由や根拠を見つけて吟味していくのが，協同的な学びだと捉えている。

また，１人で対象に向かった場合には，「何も感じなかった」あるいは「感じたけれど，どう表現したらいいのかわからない」と戸惑う子どもがいることもある。教師が支援するのも手立ての１つではあるが，グループ内の他の子どもの感じを共有することから，納得したり，疑問に思ったり，ひらめいたりすることが生まれやすいと考える。最初戸惑っていた子どもも他の子どもの感じを共有することで気づくことが出てくるのである。その結果，どの子どもも協同的な学びを通して，音楽を工夫したり，判断したりできるのではないかと考える。そして，思いや意図のある表現・鑑賞へとつなげていくことをめざす。

②音楽科における焦点化のポイント

焦点化のポイントとして１つめに挙げるのは，「対象をしぼる」ことである。

全体をまるごとではなく，「このフレーズだけ」「この楽器の音色だけ」「このリズムだけ」というように対象をしぼって子どもたちに与える。集中するところを示すことにより，逆に全体がはっきりし，子どもたちの対象に対する世界が広がったり，深まったりすると考える。ただし，対象をしぼる条件として，教材での指導内容が含まれていることが必要だと考えている。

２つめに挙げるのは，「基礎・基本といわれる土台を定着する」ことである。

提示された課題に対して，自己の課題意識をもつためには基礎・基本が定着していることも大切である。歌い方を工夫するのであれば，声の出し方をわかっていること，リズムづくりをするのであれば，音符や拍子などの意味を理解していることが必要である。こういった基礎・基本の土台を築くことで課題に対して前向きに取り組む姿勢を得られるのではないかと考える。既習内容を生かした順序立てたスモールステップを積み重ねることにより，子どもたちが楽しく自然に基礎・基本の土台を身に付けるようにしていく。

３つめに挙げるのは，「比べる活動を取り入れる」ことである。

対象や自己との対話を促すための視点として，「比べる」活動を取り入れていく。同じ曲を長調と短調で聴き比べる・楽器の奏法の違いを生かした演奏を比べるなど，子どもたちに意外性を与えるものを比べる対象として用意する。比べることで今までには気付かなかった新しいことを発見したり，もっと深く考えたりできるようになる。一定のところで止まっていた対象や自己との対話が「比べる」活動を取り入れることで活性化するのではないかと考える。

（２）音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と一緒に歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽にも興味がある・仲間の音楽表現にも興味が

ある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには，音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の３つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。　(*ここで言う「能力」とは，「思考力・判断力・表現力」の総称である。)

音楽的「知識・理解(knowledge & comprehension)」「技能(skill)」「能力(ability,capacity)」の３つが，音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の３つを身に付けることで，自分に合った生活スタイルを見つけ，自分を音楽で豊かにし，生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり，仲間とのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

本校の子どもたちは，よく歌いよく表現する。これには「リクエスト・タイム」（全学年で個人持ちの歌集・３訂版『歌はともだち』から子どもたちのリクエストで歌う活動）が大きな効果を生んでいる。歌のレパートリーが非常に多く，音程を正しく取ることができたり，聴いてすぐに歌えたりする子どもが多い。

しかしながら，楽曲を成り立たせている諸要素を比べて聴いたり，思いや意図をもって音楽的に表現したり，音符や記号，用語から音を思い浮かべて表現したりする活動では，年々進んではいるがまだまだ課題がある。今年度，理由や根拠をもって自分なりの音楽的な意見が言える・表現ができる子どもの育成をめざしたいと考えている。

２．音楽科学習における「学びの質の高まり」

音楽科学習における「学びの質の高まり」とは，

①学習したことが使えるようになること

②学び続ける目標がもてること

であると考える。すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識，技能を確実に身に付け，活用する力を育むとともに，目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

そこで〔共通事項〕（抄）に着目し，思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基を築いていきたい。

・音楽を形づくっている要素を聴き取り，面白さ，美しさを感じ取ること

・身近な音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

これらは，すぐに身に付くものではなく，定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて具体的に「書く」および「ことば」または「からだ」で表す活動も必要となろう。グループで考える・表現するなどお互いに関わり合いながら学びの質を高めていきたい。

また，学び続ける目標をもつためには，達成感は欠かせないと考える。「こんなことができた」「表現を聴いてもらえた」と満足した気持ちになることが大切である。達成感を味わうことで，次の活動意欲

へつなげていくことができる。ただ，思いや意図をもつことができたとしても，その通り表現できるかは別問題であることも多い。そこで１人では表現しきれない思いや意図をグループやみんなで表現していき，音楽の魅力にせまりたい。

３．研究の展望

音楽科では，子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために，「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して，音楽の魅力にせまりたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために，以下の方法で楽しみながら学びの質が高まることをめざす。

① 表現と鑑賞の活動において，「比べる」学習の筋道を明らかにする。

② 集中して聴く（見る）活動から，感じ取ったことを言葉などで表せられるようにする。

③「比べる」活動を「対話」とリンクさせることによって，楽しみながら学びの質が高まることをめざす。

課題Ａ《４つの活動領域》	「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」

課題Ｂ《育てたい力》	音楽的「知識・理解」 音楽的「技能」（習得事項：〔共通事項〕を含む） 音楽的「（活用する）能力＝思考力・判断力・表現力」 ＊「関心・意欲・態度」はこの３つを支えて不可分

課題Ｃ《質を高める指導法等の開発》	どのように比べるか

◆本研究で明らかにすること

課題Ａ「どの教材で」⇒課題Ｂ「どの力を」⇒課題Ｃ「どのように比べれば」育つか

４．研究の評価

①「比べる」活動を行うことで子どもたちの学びが変化したか。その変化を表現にいかすことができたか。

②「比べる」活動を行うことで子どもたちが思いや意図をもって表現することにつながったか。

③事実を見つけ，その事実を根拠として「吟味」する音楽的な言語力の高まりから，すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。

④課題設定の工夫（教材設定の工夫，発問の工夫，課題プリントの使用や一覧表示）によって，すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもたちの学びが，客観的に変化の様相を見せたといえるか。

(注)『音楽とは対話である』：著名な指揮者であり音楽学者でもあるニコラウス・アーノンクール（1929～／オーストリア）近著のタイトル。